恨の介の恋と死

田川邦子

『恨の介』はたしかに古風な恋物語である。

近世初期約八十年余の間に世に出た、仮名草子といわれる雑多な作品群が分類整理されるとき、この作品があまりにも中世風の様式に忠実なために、『薄雪物語』などと共に、中世風の恋物語という系列に組み込まれるのも、当然それなりの理由あってのことなのであろう。

まず第一に、神仏の霊夢による恋の導き、仲だちをする侍女や腰元の存在。歌のやり取り、恋文の度重なる往来と、許容の心を内側に秘める謎掛けの言葉、もしくは和歌など。女主人公の衣裳や調度品、容貌などについての詳細な描写の展開。しのびの段、後朝の別れ。想い死にと周辺人物の死。こう書いてくれば、恨之介と雪の前の恋物語を嵌め込んだ額縁の意匠そのものが、あまりにも古風で中世風で、慶長末から元和初年頃といっても、まあこの程度のものかと、時代は変っても、古い様式の生命力の強さを、改めて思わずにはいられないほどである。ところがこの古い意匠の間に、なんとなく近世風の色合いが透けて見えて、これが問題になるところなのだ。

近世風といってよいかどうか分らないが、中世の恋物語には殆ど見られない、群衆の中の孤独な顔とでもいうべき、孤独な顔の持ち主として、主人公恨の介がまず登場することである。これは『竹斎』にも共通している。「貧にして病者さらに近付かぬ藪医師竹斎、「夢の浮世をぬめろやれ、遊べや狂へ皆人」と、「世にあり顔」の群衆を前にして、一人心細い思いをしている恨の介。新しい時代の主人公たちが、新時代の風俗世相に馴染まず、このような孤独な顔つきで登場して来るのは、なんとしても気になるところであるが、この違和感、孤独感が、彼らの感受性の基調であり、同時に作品の重要なモチーフになっていることは見逃せない。中世の物語なら、孤独は必ずや仏教的無常や諦観と共存しているはずなのに、我が身を観ずるよすがとなる仏教はもはやここになく、替わって新時代の太平を謳歌する群衆の中に、主人公たちは、我が身の孤独を思い知らされるわけなのである。

『竹斎』ではこういう孤立感が、狂歌的発想による風俗批判へと展開し、それだけでは足りないのか、主人公による逆説的演技までがつけ加えられる。『恨の介』は、禁を犯して雲の上の美女と契り、身の運命のはかなさを、その名の通り恨みかこちながら、恋に死ぬわけだ。

中世風恋物語『恨の介』に透けて見える、中世物語には見られない諸点はまだ他にもある。「何を言はんも語らんも、唯一人」のはずの主人公恨の介が、筆者により作品中に最初に紹介される時、決

して一人だけの名が書かれるのではない。

ここに、葛の恨の介、夢の浮世の助、松の緑の介、君を思の介、中空恋の介とて、その比都に隠れもなく、色深き男どもあり。

まずこれらの名前が、近世初期一世を風靡した〈かぶく〉風潮の中で、〈かぶき者〉をもって自任する男たちが、好んで自称した替え名と共通であることだ。と同時に、恨の介と雪の前の恋物語であり、他の男たちは末尾に少々顔を出す程の軽い扱われ方であるにかかわらず、これら「色深き男ども」の集団の存在が、孤独な恨の介の背後に透けて見え、これを当時一世を風靡した〈かぶき者〉たちと重ね合わせるとき、中世の恋物語の主人公とは、まるで趣の異なる登場の仕方が何に由来するか、納得のゆくところなのである。

女主人公雪の前が、木村常陸の息女であるという設定については、今さら言うまでもない。秀次事件に連座して自刃した木村常陸の息女に、近衛家の養女になった人が実際あったかどうか分らないが、まだ記憶にも新しい関白秀次の悲劇的最期に重ね合わされる雪の前の運命には、始めから暗い陰が付き纏い、恋物語のヒロインに相応しい資格が附与されている。神や仏の申し子、または継子いじめなど、中世の恋物語で一般化している女主人公の類型は、豊臣家所縁の、しかも秀次事件に連座した木村常陸一族の女ということで、極めて現実性あるものに置き換えられた。この雪の前が近衛家の養女になり、后や女御たちの五節の遊びの折、禁中で琴を弾じ、叡覧あって、帝から雪の前の名を賜わったということは、現実に置き直せば、どういうことになるのか。後宮の一員とはいえないまでも、禁廷に出入りする貴女であるとする書き方は極めて暗示的で、例の世間の耳目を集めた、宮廷密通事件（慶長十四年）の匂いを嗅ぎ付ける松田修氏の所論[1]には、やはり心を惹かれるものがある。つまりこの物語が、宮女を相手の禁断の恋をテーマにしていると見れば、たった一度の契りの後、あまりにも果敢なく想い死にをした恨の介の絶望感は、非常なリアリティをもって蘇えるのである。

恨の介のモデルに、松平若狭守近次を想定するのは野間光辰氏で、この説[2]にもまた無視するわけにはゆかないところがある。

松平近次は家康の御小姓から、後に伏見城松丸の守護に加わった、出自も良い青年武士で、慶長十一年五月、殺人、女色の咎めなどで改易されている。『台徳院殿御実記』には、「そのうへ宮仕する女房と密通の聞えあるゆへとぞ」とあり、ここにもやはり、宮女との密通のにおいは漂っているのである。

宮廷密通事件は、複数の男女が出会った乱交であり、近次の場合は一対一であるらしい。事実に近いところを詮索すれば、モデル近次説の方に分はあるようにも見えるが、いずれにしても皆想像である。色好みの伊達男たちは、とかく仲間を語らい、徒党を組む傾向があったようだし、憧れの君が宮中の美女であったことも不思議ではない。当節都に目立った若者たちの風潮や行動が、この物語の中にも影を落していると見るならば、松田説も野間説も、共に肯ける。

恨の介は貴族か武士か。野間説に従えば武士であるが、貴族であるとすれば、少々教養に不足するところがあり、武士とすれば、その精神はあまりにもひ弱である。けれど道ならぬ恋にのめり込む男を、中世風の恋物語のスタイルで描こうとすれば、武士であっても武士らしくは描きにくいだろう。ただ武士と考える方が、物語の奥行に深みを増すことは確かである。武士はこの時代の主役であり、支配者権力者だ。その階級に属する若者が、旧勢力の貴族の女と、道ならぬ恋におち、あたら一命を捨てたとあれば、これは時代への一つのイロニイとなるからである。ただ筆者は、そのような明確な

視点をもって書いているわけではない。古典的教養、古い文学のスタイルが、彼の物を書く意識の中に、あまりにも深く滲みついていて、それがこの作品全体を広く蓋っている以上、他の要素は、その合間々々にちらちら見え隠れにしか見えないというのが、実際のところなのである。

『恨之介』は、禁断の恋に命を落した若者の物語であり、さればこそ主人公の名も〈恨の介〉なのである。

もともとは、「秋風の吹きうら返す葛の葉のうらみてもなほ恨めしきかな」(『古今集』平貞文)あたりの古歌に由来して、〈葛の恨の介〉の命名はあったのであろう。作中には、ようやく一夜の密会の折を得て、男が女の局に入るとき

葛の葉の恨と云は誰やらん
の女の間に
君の情の無き身なりせば

と男が答えるところがあり、葛の裏葉にかこつけた心変りの恨みが、得難い女の愛を怨ずる恨みへと、ややずれて行くところを表わしている。禁断の恋故の恨みなのである。

こういうモチーフが、もっともよく表われているのが、次の條ではないだろうか。長くなるが引用してみる。

雪の前殿仰には、「会者定離の習、素より驚くべきにあらず。拙き女の身さへ、かくと思ひ参らせする。名残は我も同じ事、さらば〳〵は」との給へば、恨の介袖にすがりつき、「またいつぞ」と申ければ、雪の前殿「後世にて御見参に参り候べし」と仰せければ、涙にむせぶ御別れ、見るめもあはれなるべしや。

「今宵ばかりは」「千夜が百夜に積り来て、百夜が十夜にならばや」、「一期は闇にも」なれかしと、一生一度の深い契りを交わした男女の、後朝の別れの條である。

「またいつぞ」と再会を促す男に、「後世にて御見参に参り候べし」の答えは、明らかに拒絶の意であり、これは雪の前の困難な立場を表す言葉として、「またいつぞ」の、再会を要求する男の言葉と共に、一篇中ではたいへんリアルな響きを奏でるところである。

恨の介が雪の前のこの言葉に絶望し、病の床に就いたのは是非もないことで、物語では言葉こそ、その全世界を支配し、主人公の運命もそれによってこそ導かれて行くものであるから、恨の介の再会の望みも、もはや後世に托す他はない。

「後生にと」かの姫の仰せられし言の葉を、閻魔の前の訴いと思ひ定むる我なれば

という恨の介の言葉が、これをよく表わしていて、死後の世界への意識は、もはや中世の物語ほどには重みを持たされてはいないにしても、形だけでも懊悩する主人公の意識の底に歴然としている。ところが驚くことには、恨の介の死を伝え聞いた雪の前が、

其あか月自らにすがりつき、恨殿の給ふやうは、「又いつぞ」とありし時、只大方と思ひ、「後生にて」と申せしを、嘆き給ひて空しくならんとは、夢共知り参らせず

と、涙を流して友人菖蒲(あやめ)の前に告白することである。だとすれば恨の介は、女の言葉を誤解していたことになる。「只大方と思ひ」は、〈普通の挨拶のつもりで〉ぐらいの意味であるから、〈私はそんそに重大な意味であの言葉を言ったわけでもないのに、彼が誤解して――〉ということになって、今風に考えれば、事が大きくなったのに忙てた女の、責任逃れの言葉のようにもなってくる。とすればその直後、「あつ」とばかりの給ひて「空しく」なった女の死は少し

唐突すぎるのではないか。

中世風の恋物語についていえば、この辺の書き方にもまた様式上の約束があって、『恨の介』も、この事情を無視して眺めるわけにはゆかないようである。つまり女が男に（逆の場合もある）対して、許容の意志を伝えようとするとき、その言葉は決して直截な表現とはならず、多くは謎かけの形で行われることである。言葉が全世界を支配する古物語であればこそ、このような様式も成り立つので、投げかけられた謎の言葉は重大であり、主人公がこれを解けない限り、世界は進行停止となり、窒息状態に陥ってしまう。中世の恋物語の興味の一つは、この場合の謎掛けと謎解きにあることは、疑う余地はなさそうだ。

『恨の介』の謎掛けは、当然のことながら雪の前が恨の介に贈る消息文の中にまず現われる。これも長くなるが引用すれば、

――無き世なりせばいかばかりの、上の五つの文字ならば（なくば）、衛士の焚く火に諸共に、いざ立寄りて磯馴松、切り焼べて焚く同じ身の、煙と共に消えんとも、逢はんと思へ葛の葉の、秋の最中の事なれば、一叢薄穂に出でん。たゞ何事も真葛、月の最中に言の葉の、その末頼め神無月――

と、七五調の、初歩的な古典的詩語の寄せ集めから成る、アラベスク風の文章模様の中から、そこに嵌め込まれた言葉を捜し出す仕掛けになっていて、当然の事ながらそれは古歌の断片であり、それも極ありきたりの古歌である。つまり「いつはりの無き世なりせばいかばかり人の言の葉嬉しからまし」（『古今集』）、「御垣守衛士の焚く火の夜は燃え昼は消えつつ物をこそ思へ」（『詞花集』）、「名にし負はば逢坂山の真葛人にしられでくるよしもがな」（『後撰集』）、「水の面に照る月なみを数ふれば今宵ぞ秋の最中なりける」（『和漢朗詠集』その他）などを探り当て、密会の日にちを解けばよいだけの仕組みになっているわけだ。恨の介にはこれが分らない。そこで細川玄旨（幽斎）の家臣で和歌の道に達者な人物を尋ね、解いてもらう。ここで、

か程の事を知らずして、雲の上人へ一筆を参らせし事、勿体なき奴め、身の程を不憫と我が心にて恥ぢにけり。

という恨の介の自嘲がちょっと印象に残る。このように『恨の介』には「後生にて御見参」の他に、手のこんだ謎解きがあり、これがいかにも古態な物語の風格と合致しているのである。

他の中世、または中世風の恋物語にも、この謎掛け謎解きは、当然のことながら存在する。例えば同じく仮名草子の『うすゆき物語』である。この書簡体小説は、『恨の介』以上に古典的雰囲気の充満する作品で、創造性よりも、歴代恋物語と相聞歌の徹底した総攫いで、筆者の古典教養の広さと深さを思わせる作品だ。

盛り沢山の贈答があったのち、女の薄雪が男に送るのは、「谷陰のうす雪、このよのうちはなるまじく」の言葉であった。「この世のうちにならじとは、未来の事と心得」、男は「いよいよ堪えかね、今を限りと」見えたとき、ある人が、

谷かげに降るうす雪も春日にて人知れずこそとくるものかな

の古歌を示し、「今宵のうちにはとけがたし、明日は人しれずとけ給はむとの御返事なり」と解き、女が掛けた謎はやはり第三者によって解決し、男の想いは遂げられる。『恨の介』の「後生にて御見参」は、このように『恨の介』に始まるものでもなく、恋物語の謎掛けのうちでも、最もありきたりのものに属するようだ。

また室町時代物語の『朝貞のつゆ』には、

いまはきてそのかひあらしのりころもこのよをさりてのちのよ

にきよ

とあんへれは、つゆのみやきこしめし、おもしろの事のはや、このよをさりて、のちのよにきよとありしは、こよひはかへり、ゆふさりきたれとの事なり

とあり、「この世、のちの世」は、「この夜、のちの夜」に掛けて使われ、謎かけ謎解きの趣向としては、古くからよく行われていたことが分る。この古風な物語では、謎解きは第三者を煩わすこともなく、主人公つゆの宮自ら難無く解決してしまう。同じ『ふくらふの草子』では、

さりながらそもじとこんやの機縁薄くして、契りし事もよもあらじ、来む世すぎて又来む世、天に花咲き地に実なり、西方の彌陀の浄土にて契りなむ。

などとあり、謎解きもよほど手がこんで、娯楽の域に近づく。男（ふくらふ）の夢枕に立つ薬師如来がこれを解き、

こむよ過ぎて又こむよとは、明日の夜の事なり。天に花さきとは、月星いでさせ給ふことなり。地に実なるとは、ほのかにあかくなきことなり。西方の彌陀の浄土とは、これより西の阿彌陀堂の事なり。

との答を出す。梟と鶯姫の恋ということもあり、内容は恋物語の趣向性を楽しむ娯楽風の読物で、言葉遊びもそれだけ手がこんでは来るが、「天に花さき」は夜空の星、「西方の彌陀の浄土」は西の阿彌陀堂などと、いかに意表をついた卑俗な落ちは、あまり文学的とはいえない。しかしここにも「こむよ過ぎて又こむよ」は来世のことではなく、「明日の夜の事」だとする謎解きはあったのである。

やや脇道に逸れるが、恋物語に場を借りる言葉遊びの面白さという点で、最も徹底しているのが、室町中期以降の作と思われる『和泉式部』で、二十一首連ねた恋の数え歌と共に、「ふりふりして」という謎掛け言葉を、ここでは男の方が提示する。意外にも解くのは和泉式部ではなくて、「禁中」の高貴な人なのだが、それはあまりにでたらめだ。「伊勢が源氏を恋ひて」詠んだ、「君恋ふる涙の雨に袖ぬれてほさんとすれば又はふりふり」という歌の心ばえだというのである。「ふりふりして」という言葉の卑俗な響きと、涙と雨にかけて用いられる、「ふり」に関する伝統的修辞法のとり合わせの妙が、ここでは趣向の着眼点であるに違いなく、筆者は物語に場を借りて、読者と共に言葉遊びを楽しむ心づもりらしいのが、あの数え歌二十一首と共に、よく理解できる。

『うすゆき物語』は、このお伽草子の和泉式部と道明阿闍梨の恋物語をも、作中にとり込むが、いささか文芸的価値を高めようとの苦心の跡が見られ、「ふりふりして」の卑俗な謎かけ話は省き、歌のみを残している。この物語の先にも述べた主人公薄雪の「谷陰のうす雪、このよのうちはなるまじく」に対する、「谷かげに降るうす雪も春日にて人知れずこそとくるものかな」の解答は、「古歌」によるとはいうが、おそらく筆者自身のものではないかと思う。「この世」に「この夜」を響かせ、雪が「融く」に下紐の「解く」を掛ける修辞法は、別に目新しくもないが、謎のかけ方解き方には、書き手の歌道精通からくる達者さと、品の良さが窺われ、この部分によって『うすゆき物語』全体の文芸性は、一段と高められているのは否めないのである。

これに対して恨の介が雪の前に送る、数種の古歌を嵌め込んだ恋文は、冗長な七五調で、手が込む割には感銘も薄い。古物語の範に習い、想いの伝達を謎かけ言葉に託す古典的方式には、如何にも忠実で、「野中の清水」から「色をも香をも」「いつはりの無き世な

りせば」以下の古歌の羅列の中に、筆者の古典教養が、それほど浅いものではない事もよく分る。私どもは、この筆者の手の込んだやり方を見れば〈中世風の恋物語〉の烙印を押さざるを得ないのであるが、こういう方法が『恨の介』の主題と、まったく見合ったものであったかどうかをもう一度考え直してみるのも悪くはない。

先にも述べたように、これは禁断の恋を扱った作品で、それがもっともよく表われているのは、「またいつぞ」と再会を促す恨の介に、「後世にて御見参に参り候べし」と雪の前が答える、後朝の別れの條である。ここには明らかに、「この世、のちの世」に「この夜、のちの夜」をかけて使われて来た、あの伝統的な修辞法が借用されている。拒絶の形で許容を表現する女の微妙な心理を表現するための、定式化した中世風のあのスタイルである。しかし雪の前の答えは「後世にて御見参に参り候べし」であった。これは果して「只大方と思ひ」て言われた言葉であったかどうか。明らかに拒絶の響きを持つものではないか。拒絶とまではいかなくとも、雪の前の困難な立場が、よく表明されている言葉であるから、恨の介の絶望は決定的だったのである。この場はこういう解釈しか成り立ちようがない程、恨の介にとっては、重い響きを持つ言葉としてここにはあるのである。

しかし同時に、「後世」は「のちの世」であり、「のちの世」は「のちの夜」だとする、あの中世以来のこういう場に於ける伝統的了解事項は、そう簡単には払拭できないはずである。「只大方と思ひ、後世にてと申せしを」という雪の前の弁明は、このことをよく表わしている。一見自己弁護に取れるけれど、これも決して筆者によってそのような明確な意識で書かれたものではない。

中世風の恋物語を支える柱の一つとなっていた、掛け詞的修辞法による了解可能の世界は、もうここでは完全に分裂している。たった一つの掛け詞「とく」を有効に使った『薄雪物語』に比して、ただ無闇に古歌の断片を寄せ集め、隠し絵風に文脈に嵌め込んだ『恨の介』の艶書にも、このことはよく表われているのであって、中世風のスタイルを持ちながらも、表現の細部を検討すれば、もはや中世風の様式は、微妙な点で崩れ去りつつあるのがよく分る。

もちろん古典的修辞法は、まだまだ近世文学の中で、これ以降も生きのびはするし、散文にも語りの詞章にも、有効な表現手段としていくらでも使われる。けれどそれが本当に生きているのは、「恋は闇といふことを知らずや」[5]と、灯を消した七才の男の子のおませな行為とか、「とやせんかくやしやうげ鳥。いすかのはしのくひちがふ」[6]などの、俗語の文脈に生かされる時なのである。

中世風恋物語を支えていた古典修辞法が分裂したとき、その分裂の間に入って恨の介は絶望死し、雪の前は物語のヒロインにはありえべくもない、現実の女の顔を覗かせ、「只大方と思ひ、後世にてと申せしを」と、自己弁護風の言葉をつぶやかなければならない。この辺のところが中世風恋物語『恨の介』の、中世風ではないところとして、気がかりなところなのである。

（注）(1)「うらみのすけをめぐって」（『国語・国文』昭三〇・一二）(2)『御伽草子・仮名草子』（鑑賞日本古典文学・角川書店）(3)「古への野中の清水ぬるけれど本の心を知る人ぞ汲む」（『古今集』雑上）(4)「君ならで誰にか見せむ梅の花色をも香をも知る人ぞ知る」（『古今集』紀友則）
(5)『好色一代男』巻一「消したところが恋のはじまり」
(6)『冥途飛脚』中巻